式章と念珠を身に

幼い頃、「式章をつけて礼拝しなさいよ、念珠を手にお念仏しなさいよ」とやかましく言われ、少しうるさく感じていました。しかし振り返って考えますと、身だしなみや作法を通し、大切なこころを教えてくださったことに気づきます。

式章は、本来、頭を下げるはずのない私に、下げずにおれないわが身であると教えていただきます。念珠は、手を合わすはずのない私に、合わせずにおれない、ご恩を知らせて下さいます。いつでもどこでもの阿弥陀さまのはたらきが、式章や念珠となって届けられ、わたしを育て続けて下さるのです。

仏前にお参りする際には、式章を身につけ、念珠を手に合掌することが、阿弥陀さまを敬う、最もふさわしい姿となります。

５０年に一度の大遠忌を迎えます。先代の姿を引継ぎ、後に伝えるべき姿として、お寺に参拝する際は、式章をつけ念珠を手にし、お念仏申させていただきましょう。

親鸞聖人七百五十回大遠忌法要記念門徒式章
（協力：鍵長法衣店・浜屋株式会社）

連絡先

©監修　本願寺仏教音楽・儀礼研究所

シリーズ大遠忌Ⅰ

装束

僧侶の装束

縁儀の光景から

荘重な雅楽の調べに乗って、阿弥陀堂から御影堂へと続く「縁儀」＊の列。それぞれの役割に応じた、色とりどりの装束を身にまとった僧侶たちが、歩みを進めます。

僧侶は、きらびやかな七条袈裟や五条袈裟をまとっています。これらの袈裟は、小さい布を縫い合わせてできています。それは、昔、インドでは、僧侶は端切れ布を拾い集め、縫い合わせて一枚の布を作り、それを着ていたことに由来しています。

＊導師以下の諸僧が、行列をして堂縁を通って入堂する作法

縁儀（『蓮如上人五百回遠忌法要写真大鑑』より）

内陣の僧侶たち

さあ、いよいよ僧侶が内陣に入り、法要が始まります。

内陣は、ご本尊を中心とした宗教的な“聖なる空間”です。威儀を正した装束を身にまとった内陣の僧侶たちは、お勤めの内容によって、ある時はお釈迦さまの説法の再現者となり、またある時は浄土の菩薩がたを演じる役割もします。

「まるで極楽浄土を見ているみたい！」さもありなん。私たちは、御堂で行われる荘厳で厳粛な儀礼に参加しているうちに、阿弥陀さまの宗教世界へと向かう意識改革が自然に惹き起こされているのです。

あっ、散華がはじまりましたよ。お浄土の蓮の花びらが舞い散っているのですね。

門徒式章と念珠

肩衣から式章へ

浅原才市像（安楽寺蔵）

結婚式に出席する時など、よそ行きの服に袖を通すと、自然と身が引き締まり、相手への敬いの心が起こります。では、皆さんは、お寺へお参りする時、どんな服装でお参りされますか？

その昔、仏前に座る際には、着物の上から肩衣を身につけていました。当時、肩衣の着用は、最高の敬意を表す正装だったのです。あの有名な、鬼の角がはえている浅原才市さんの肖像画も、ちゃんと肩衣を着た合掌の姿です。

昭和7（1932）年に、その肩衣を簡略化した「式章」が制定されました。それ以降、真宗門徒にとって、式章は仏事の際の正装とされるようになりました。